
井戸端の文学少女

つんどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

井戸端の文学少女

【Nコード】

N7965Z

【作者名】

つんどら

【あらすじ】

ふらりと近寄った井戸から、飛び出てきたのは骨だった。白髪の骸骨男に一目惚れされ、連れ帰られ。妖怪・狂骨と文学少女が送る穏やかな日常と恋愛の話。拍手にて連載中の異類婚姻譚シリーズから。掲載し終えた物を手直しして、小話を幾つか追加しています。

一（前書き）

拍手に掲載していたものを手直ししています。

内容は殆ど変わっていません。

小話も追加しております。六話目からになります。

R15となっておりますが、性描写はかなり薄め……です。多分。
ではどうぞ。

骨のような　ではなく、骨そのものの手が私の頬に触れる。
眉を顰めると、思い出したようにその手が肉と滑らかな肌に覆われ、ひんやりしたそれが頬を通り過ぎて首筋までをゆるりと撫でていく。

「撫子……いつになったら、いいのですか？」

物憂げに目を細めたのは、長すぎる睫が頬に影を落とすような人外の美貌を持つ男。

というより本当に人外である。

死人じみた肌の白さや、伸びた白髪と対照的に、普通ならありえない程に黒い瞳。木の洞、あるいは井戸の底を思わせる目だ。

「……骨が出なくなったら」

この人　この妖怪は、狂骨の薄^{すすき}という男だ。
どうやら、私を妻にしたいらしい。

女子高生だった私は、読書が好きなくらいしか特徴のない女だった。読書が好きだから図書委員で。現国古典漢文全て得意、英語も

そこそこ。更に言えば、将来の夢は司書。

友人は少ないが、それなりに浅く薄い付き合いはあり、人間関係に苦労した記憶もない。

とにかく本さえ読めればそれでいいと、思っていた。

さて、私の住む町の端に、朽ち掛けたような家　要するに廃墟がある。林の側にあるその家は、どこか異界じみた雰囲気があり、他の人が怖がって近づかないのをいいことに、小さい頃から本とお菓子なんかを持って1人で居座ったものだ。

その裏手には、枯れた井戸がある。　その井戸には近づいてはいけないと、大人たちは言う。その井戸には悪霊が居るのだと、町の老人たちが笑う。枯れ井戸など危険だからそう脅したのだと今なら分かるが、恐れ知らずの子供も近づかないような不気味な場所だった。

けれど私はその日、何故なのか無謀にも近づいてしまった。というより、吸い寄せられたような感じであつたように記憶している。

井戸の前に立つ。その深淵を覗き込むと、眩暈がした。このまま落ちたら、きつと誰も助けにこない。もし何かあつて自殺するような羽目になったらここに来ようか、と思つたところだった。

井戸から不意に白い影が出てきたのである。

それは、死体だった。完膚なきまでに死体のように見えた。

白い衣のように垂れ下がる髪、落ち窪んだ眼窩、そして体を構成する筈の肉が1つも存在しない、渴いた亡骸。

殺される。呪われる。祟られる　とにかくあらゆる種類の恐怖が駆け巡り、顔を引き攣らせ腰を抜かした私の前で彼はこう言ったのである。

「お嬢さん、お怪我はありませんか」

と。

骨は手を差し出し、私はわけも分からないままその手を取る。すると骨はようやく井戸から出て地面に足を付き、紳士というよりどこぞの騎士のような仕草で膝を付いた。

「お会いしたばかりでお恥ずかしいですが、一目惚れました。妖怪の慣わしとしてあなたを連れ帰りますが、何か取りに帰りたいものはありますか？」

そして手の甲に、口付けられて。色んな意味で衝撃だったが、その物腰に似合わない強引極まりない理論にも仰天した。そして私は思わず、こう答えた。

「……ほ、本を」

妖怪の資料をありったけ掻き集めた私を誰が責められようか。父よ、今さらだが謝ろう。秘蔵の北斎や石燕の画集を持ち出したのは私だ。娘の棺に入れて焼いたとも思ってたほしい。

拒もうともしたのだが、自慢ではないが私は小心者である。死霊に目を付けられて警察に駆け込む訳にも行かず、しばらく自宅で問答して言い負かされた。

口は上手い方だと思っていたものの、骸骨の迫力に負けた。しかしせめて人間の顔をしてくれないと困ると連呼したら、ようやく人間に化けてくれるようになって一安心……では、ない。

「肋骨出てます」

「……すいません」

「いいえ」

長年骨の姿で過ごしてきた所為で、あまり人間の姿が馴染まないらしい。

着流しの胸元から除く白い骨を見て、私は溜息を吐いた。

「どうして骨だといけませんか？」

「……何かの拍子に折れそうで怖いです」

見た目にはとうに慣れたが、怖い。

井戸で死んだというが、死後いつたい何年経っているのだろうか。この家……薄の私邸だという日本家屋の布団は、結構ずしりとくる潰れないかと心配なのだ。

「心配してくれてありがとうございます。でも、そこそこ頑丈ですよ」

資料を鵜呑みにするならば、彼は相当な怨みを抱きながら井戸で死んだ筈だ。

狂骨は井中の白骨なり。

世の諺に 甚しき事をきやうこつといふも このうらみのはなはなだしきよりいふならん。

いったい何を恨んでいるのか、時折興味が沸くけれど、あまり聞く気にはならない。

「……そうですか」

人の姿になつても骨ばつた印象のある指先。細長いとかすらりとしているとか、そういう言葉が当てはまらない。痩せ細つた、と言つのが正しいだろう。

私よりもずっと脆そうに見えるのに、壊れ物を扱うような手付きで私に触れる。

「撫子……本当に細いですね。もう少し食べなければ」

「あなたにだけは言われたくありません」

たまに母親っぽい言動になるのはやめてほしいけれど、骨でも受け入れられる程度には、私は彼のことを好いているのかもしれない、と思つた。

私が生まれたのはいつのことだつただろう。死んだのは、いつのことだつただろう。

それすらも思い出せぬほど永い時が経つた。最早死の経緯も覚えではないし、ただ幽かにあの地獄のような怨みだけが残っている。だがそれも、もう消えてなくなりそうなほど、今が幸せでたまらない。

撫子は腰まで伸ばした黒髪の、まさしく大和撫子と言つに相応しい少女だ。力を入れれば折れてしまいそうな細腕なのに、芯の通つた性格が好ましい。

話には聞いていたが、人間の女性というものは確かにいいな、と思つた。

あの日私は、井戸の底で湧き上がる怨念を押し止めながら蹲って1月ほど経っていた。

こうしなければ、暴れてしまうから。

私が死に、そして生まれた日からけして消えないと思っていたその感情。

ふとそれが晴れるのに気づいたのは、見上げた円形の空にどこか無防備な顔が覗いたその瞬間であった。

こちらに向かつて垂れてくる黒髪。陰の掛かった顔は、僅かに光の当たる部分を見る限りとても白い肌をしていて、唇は瑞々しく、目は少し釣り目だがきつそうな印象はない。

憎悪や怨念と入れ替わりに湧きあがったのは、強い衝動。

もうその日のうちに、連れ帰っていた。

いつか使えと与えられ、1度も行かなかった家に。

白い指がはらりとページを捲る。私には読めない異国の本には、所々綺麗な絵が書かれている。彼女のために里で買ってきた藤色の着物姿で柱に凭れかかり、時折脚を動かしたり、指先で目の下を拭いたり、唇を小さく開けて溜息を吐いたりする。

そこには小さな世界があった。

溜息が風となったように庭の笹が揺れてさらさらと音を立てる。

ふと彼女は顔を上げて、竹林から飛んできたらしい葉が飛んでいくのを目で追い、最後にこちらを見た。

「薄」

今の今まで気づいていなかったらしい。目を細め、本に棊を挟んでたと閉じる。笑顔を安売りしないところも、とても好みだ。

あんなに四六時中本を読んでいるのに、声を掛けるとすぐ自分だ

け見てくれるのが、たまらなく嬉しい。子供染みているとは思うが、彼女の中で上位にあれる事に歓喜を感じる。

「撫子」

なかなか正式に妻とすることは許してもらえない。骨が出ないようになるのはいつになるだろう。しかし、もう遠くはない未来。でも、今は。

「ご飯にしましょう」

触っただけで折れそうなその腕に、もう少し肉をつけてほしいと思った。

一（後書き）

痩せ型同士が両方折れそうで怖いって思ってたらかわいいなー
そんな感じの発想だった筈。 どうしてこうなったのかは不明です。

とにかく雰囲気重視してみました。

縁側に出ると、珍しくも彼女は柱に凭れたままうつらうつらとしていた。

膝の上に置かれた本は、開かれたままその上に手が乗っている。

「……おや」

隣に座り、少し乱れている裾を引っ張って直す。妖怪となつてから色々と枯れ果てていたと思っていたが、今の私には目に毒である。眼福でもあるが。

着物に慣れていないらしく、起きている間は兎も角寝ている間はとても無防備だ。

暫くそうしていると、小さな頭がこっくりと前に揺れた。危ないと思つて軽く支えると、そのまま方向を変えて肩の上に収まる。

その幸せを堪能しながら、ふと、その膝の上にある本をそつと引き抜いて、目で追う。

『死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つて。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢いに来ますから』

私の頃と、随分文字が違って少し苦労したが、ようやくその目に付いた台詞を読み終える。

どういう物語なのか、始めから読んでいないからとんと検討も付かない。ただその台詞を読んで、ふと、不安になる。

彼女もいつか、こうして、居なくなってしまうのだろうか。

『日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、あなた、待っていられますか』

自分は黙って首肯いた。女は静かな調子を一段張り上げて、

『百年待つていて下さい』と思い切った声で云った。

『百年、私の墓の傍に坐って待つていて下さい。きつと逢いに来ますから』

「百年」

もしも彼女が、死んだと仮定する。

それだけで胸の引き裂かれるような痛みを感じる。けれど、帰ってくるというのなら　いくらでも、待てるだろう。百年くらい、余裕だ。

怨念を抱いて蹲り、あるいは暴れた永い時。それよりは、きつと短い。

でも。

「……何をしているんですか」

きつと、この声を聞きたくて堪らなくなる。その目に見つめられなくなる。その柔らかな手で触れて貰いたくて仕方なくなる。

「いえ……」

「返してください」

そうだ、と思いつく。死んだのなら、生き返らせればいいのだ。待ちきれなくなる、その前に。

狂骨。

井戸の中から、釣瓶に吊られて幽霊のように浮いている妖怪。その顔は骸骨で、白髪が生えているという。

石燕は、何故そんな名前を付けたのだろう。何を理由に、狂、という字を選んだのか。

「これ、何ですか？」

卓袱台の上に置かれたものを指差すと、薄は緩慢な動きで拾い上げる。

線香のようなそれは、僅かに甘いような苦いような奇妙な香りがした。

「反魂香ですよ」

……はんこんこう？ 私の認識が正しければ、反魂香、というもののだろうか。

「誰か、生き返らせるんですか」

それは確か、伝説上のお香である。元々は焚いた煙の中に死んだ妻が見えたとかいう故事に由来する。また別の話では、反魂樹という木の香だ。どちらにしろ、焚くだけで亡くなった者の魂を呼び戻して生き返らせる事が出来たという。正直、眉唾だが。

薄は底無しの穴を思わせるような黒い目をぱちくりとさせ、微笑んだ。

「あなたですよ」

「……私、生きてますが」

くすくすと笑う、骨男。……また肋骨が剥き出しになっている。その度に着物が脱げかけるものだから、なんともいえない滑稽さがある。

慌てたように着物を直した時には、もう肉付きが戻っていた。流石にあばらは浮いていないが、痩せた胸板は頼もしさより頼りなさがある。筋トレでもさせてみようか。

「いつか、死ぬでしょう」

そして気を取り直したように、少し真面目な顔でそう言う。死ぬなどと言わないあたりが、なんとも死人らしいかもしれないが。

……それは確かにそうである。私は人間である以上、既に数百年生きていて、更はずっと永く生きるという彼よりは早死にするだろう。自然の摂理だとは分かるが、しかし。

「命云々より先に、寿命を延ばす方法を考えるべきです。大体寿命で死んだのなら、生き返っても老人ではないですか。またすぐに死ぬでしょう」

盲点だったらしく、あ、と横で声上がる。
薄がどこかずれた感性だというのは、既に最初の時点で分かっている。

「……そうですね……はい」

「そもそもまだ結婚していませんし」

一つ屋根の下で暮らしてはいるものの。

ちゃんと人間の姿でいられるようになるまで結婚しないと言ったのだから。

そういう所はきっちりしなければいけない。約束は、守ってこそだ。

「そう、ですね……」

「たった12時間耐えればいいだけです」

だから早く、達成していただきたいものだ。

……そう思う自分に、少し胸がこそばゆくなる。

「そうですね。何も百年待つ訳ではありません」

「百年経ったら私も骨ですよ……」

何故か嬉しそうな薄を前に、私はまた溜息を吐くのであった。

二（後書き）

引用元は夏目漱石の「夢十夜」です。
花にキスするシーンが無駄にロマンティック。

三（前書き）

一部に拒食症の描写があります。

あくまで昔語りのような感じですが、苦手な方はご注意ください。

「12時間、経ちました」
「……はい」

満足げに微笑む薄を前に、私は軽く呆然としていた。

「これで……いいです、よね？」
「そうですね……勿論、構いません、が」

思わず齒切れも悪くなる。
どうして。

「では、撫子」
「はい」
「結婚してください」

あれだけ苦勞していたのに、あっさりと達成したのだろうか。
後ろ手に開かれた寝室への襖、その中に「丁寧にも用意された布団」
2つ並んだ枕を見ながら、私は気の遠くなる思いで頷いた。

午前5時から、午後5時までの12時間。

お誂え向きに、時刻は夕方。いつもの卓袱台で、今日は私が給仕をした。

お嫁さんなのだから覚えてください、とのことである。

自慢ではないが、私は家庭科の成績はそう高くない。裁縫は得意（ブックカバーを手縫いしていたら上達した）だし、お菓子も作れる（小説の中に出ていたレシピを試していたら上達した）のだが、和風料理となるととんと駄目である。人並みよりやや下を低空飛行していた。

「いただきます」

手を合わせ、相変わらず何故か私の方に寄せられた揚げ物を押し返す所から始める。

この骨男、自分を棚に上げて私を痩せすぎだと言っているのである。

確かに太っているとも言にくいと思うが、薄ほどガリガリではないだろうと思う。

「撫子、肉も食べなさい」

「薄こそ食べてください」

毎日、この繰り返しである。2人とも野菜と魚類（しかも脂の少ないもの）を好み、肉はさほどでなく、米もおかわりなどした例が無い。

兎にも角にも、2人とも少食だ。エンゲル係数は相当低いに違いない。

「……結婚するといふのであれば、抱き合ったりもするのでしょうか。……そんな骨同然の体だと、いつ折れるのかと心配になります。だから

食べてください」

「抱き合うだけに留める気はありませんが」

餌で吊ろうとしたら、思い切りカウンターが飛んできた。顔が熱くなるのを感じながら、平静を装って野沢菜漬けを箸で取り、口に運ぶ。平静、平静、平静……ああもう。

「私としても同感です。ですから、食べてください」

熱を逃がすように溜息を吐き、箸を伸ばす。1番小さな切れを取り、嫌々口に入れた。

完膚なきまでの負け戦である。……しかし、こうして問答していると、思い出す。

「……以前、薄着で抱き締められると肋骨が当たって痛い程、痩せた人が居ました」

骨と皮だけのようになり、今の薄以上に痩せ細っていたように思う。

見ていて痛々しい程で、触れる手の感触も骨のようだった。

「え……？ ……え、う、浮気ですか？」

「以前、と言っているでしょう。それに、女性です」

慌てた様子の薄を窺める。全く、そこは気にする所ではない。

かつては、私のへたくそな料理を食べてくれていた人。代わりに、彼女の拙い絵を見ては尤もらしく論評を述べたりもした。

「拒食症、という病を知っていますか」

「いえ……最近の病気ですか？」

「そうですね。まあ、存在自体はずっと昔からあったようです。それこそ、源氏物語で描かれる程だそうですし。ですが、社会的に問題となったのは現代です」

正しくは神経性無食欲症と言うが、そこは省いてもいいだろう。掻い摘んで説明すると、なるほど、と興味深げに薄は頷いた。

「背は私より高いのに、体重は私より随分低かったですね。体もなんだか冷たくて、いつも腹痛に悩まされていました。骨まで細くなるし、何を食べても吐くんです」

「……それは……とても見ていられませんね」

「そうですね。そうなる前は寧ろ、太り気味の子だったんです」

人懐っこく、人に抱きつくのが好きな少女だった。

けれどそうになってからは、抱きついたその腕が折れてしまわないかと心配になるほどで。

「彼女が亡くなったのは、もう5年も前です」

もう、5年にもなるのか、と懐かしく思う。

薄は暫く黙り込んで、わかりました、と意気消沈したような顔で箸を伸ばす。

少し小さい一切れを、これまた嫌そうな顔で口に入れた。

どうやらこの戦は、引き分けとなったようだ。

丸窓の障子から入る光で輝く、真新しい寝間着の白さに心がざわついた。

明らかに上質な、絹の白生地で作られた浴衣のようなそれ。時代劇で昔の人が寝る時に着るような、あれである。どうしろと。三つ指付けばいいのか。

非常に、気恥ずかしい。そして緊張してきた。

「撫子、大丈夫ですか？ 一人で百面相して」
「……正常です」

煩いほどに鳴っている胸を掌で押さえながら、私はゆっくりと顔を上げる。

平静を装えているかどうかは、少し……いや、大分自信が無かった。

三（後書き）

拒食症の症状についてはにわか知識ですすいません！

肉の押し付け合い。でもいくら食べても両方太らない体質。

シリーズの他の話を読んだ方はお分かりかと思いますが、妖怪社会は結婚＝初夜です。特に式とかは必要ではないです。

ちなみに今更ですが拉致はならわしでも何でもないです。何故か恒例行事になっているだけです。

四（前書き）

多少の性描写有。

四

丸窓から入る淡い光に、白い肌と寝間着が暗闇で仄かに光って見える。

お誂え向きに満月で、赤く染まった頬も、僅かに潤んだ目も良く分かった。

いい日だ、と満足しながら細い肩を引き寄せて問う。

「緊張していますか」

「……少し……いえ、かなり」

素直にそう言って、顔を逸らす。いつも周りの温度など知らぬような涼しげな様子なのに、今は白い手に汗が滲んでいる。

汗ばんだ左手で彼女の右手を握ったまま、右手を背中に回して抱き締める。私の体温の低さのせいかな、それとも別の理由か、華奢な体はとても熱い。

「百年かからなくて良かったです」

「だから、それ、何の事ですか……」

「本の話です」

「読むんですか？……ああ、もしかして、この前の。あれは別に恋人でもなんでもない、夢の中に出てきた他人ですけどね」

「そうなんですか？」

あれだけしか読んでいないので、知らなかった。

というか彼女が持つて来た本は多すぎて、探そうと思って私も私には無理だろう。

「全部で十夜ありますが、それは第一夜の話です。私は第五夜が好きですね」

「どういった話ですか？」

「戦に負けた男の話です。最期に愛した女に会いたいと言うのですが、女は会いに行く途中で天探女の鳴き真似に騙されて亡くなってしまう。あくまで夢の話という前提ですが、悲恋ですね」

「……そうですね」

「なんとなく、間の抜けた感じと、恨みがましさがなんとも……」

生き生きと語っていた撫子は、あ、と口を閉じる。

「何ですか？」

「……っそ、その、……なんというか……薄みたいだと」

今度こそ真つ赤になった撫子を見て、息が止まった。

一応動いている心臓まで止まった気がする。

色々と馬鹿にされている気もしたが、そんなことはもう、気にならなかった。

「んっ………！」

艶やかな髪を顔の脇に寄せて、色づいた唇に自らのものを重ねる。逃げようとする頭の後ろを手で押さえてますます深めると、ゆっくりとその体から力が抜けていき、抵抗が緩む。ああ、とても甘い。

唇を離し、首を支えたままそつと枕の上に頭を載せる。
無意識に唇を擦ろうとした手を掴み、指を絡めて布団に押し付け
た。

何故人間でなければいけないのかと思っていたが、確かにこちら
の方が触れ合える面積が広くていい。そもそも骨のままではこうい
う事は不可能だ。

吸い付くような肌と肌に、そう納得した。

「……っ!？」

目が覚めると、撫子も起きたばかりという様子で目を見開いてい
た。

何故驚いているのか、と思ったら体が骨に戻っている。

「おはようございます」

「お、おはようございます……あの、寝起きに骨はやめてください。
心臓に悪いんです、寝て起きたら白骨死体とか、ちょっと本気で驚
きます」

胸を撫で下ろして、はあ、と溜息。少し気だるげな様子がとても
色っぽい。

かろうじて纏っているだけといった様子の寝間着の胸元を直し、
軽く髪を梳いてやる。少し鬱陶しそうな目で見てくる事すら嬉しく
て仕方ない。

「……何ですか」

「自制のためです」

「……もう聞きません」

額に手を当てて溜息を吐き、撫子は再び枕に頭を預けた。

彼女はあまり寝起きが良くない。最初は起きてくるまで待った方が良いのかと思っていたら、本当にいつまでも起きてこない。なので毎朝起こしに行くようになった。

どうも、学校があると目が覚める性質らしい。

「いい目覚ましになりますね」

「やめてください……骨だと、呼吸もしていないから全然動かないし……死んだかと」

「心配してくれたんですか？」

「……そうですよ」

そう言って枕に顔を埋め、長い溜息を吐く。

随分と溜息の多い朝だ、と思いながら抱き起こして頭を撫でた。

「やめてください……眠いんです」

「分かっています、寝るなら向こうで寝てくださいね。あと、脱いでください」

「はいっ!？」

口をぱくぱくとさせ、顔が赤く染まる。辛うじて、搾り出すような声で「朝から何を言ってるんですかつ」と早口に言葉を紡いだ。わざと勘違いさせたが、驚く顔はやはり可愛い。

「布団も寝間着も、洗わなければいけませんので」

「……っ、わ、かりました」

動揺しすぎたのか　その場で着替えも用意せずに寝間着を脱ぎ。彼女は朝から真っ赤になって押入れに籠ったが、私はとても幸せなのであった。

やがて秋になる。溜息の風が巻き上げるのは、緑の葉から赤や黄の葉となり、彼女は読書の秋だといってますます一日中本を読んでいる。少しは構って欲しいが、読書している姿もやはり美しいので見ていたい。随分私も我俣になったものである。

たまに里に赴いて着物を買うので、そのついでに古本を貰ってくる。そのせいで、家の一室は殆ど書斎のような状態になっていた。相変わらず、周りの音や温度を置き去りにしたような彼女の世界は、美しい。

時折、楓や銀杏の葉が落ちる音。微かな息遣いの音、本を捲る音。静寂に溶け込むような、僅かな音だけが染み渡り、瞬きの音すら聞こえる気がした。

戯れに、葉の一枚を拾って真上から落としてみる。

「……何をするんですか」

ページの上に落ちた葉を掴み上げ、溜息を吐きながら見上げてくる。

隣に座って寄りかかると、仕方の無い人ですね、とばかりにもう一度溜息。

彼女の溜息には、多様な意味があると最近理解した。

「声に出して、読んでください」

「……はい？ ……はあ……」

赤い唇をちろりと舐める舌の艶めかしさ。一時、目が釘付けになる。

「草の花は撫子、唐のはさらなり、大和のもいとめでたし」

耳に心地よい、高すぎず低くもない声。滑らかに紡がれていくのは、多分古い話だろう。生憎、あまり学は無い。

さらりと髪が肩に擦れる音、時折挟まれる息継ぎの音、そして透明な彼女の声。全てが耳に心地よく、心に未だ凝っていた怨念が晴れていくのを感じる。

ああ、私はもう、あの暗いものを忘れてもいいのだ。

「……あわれと思うべけれ。あの、聞いてるんですか」

「んん……？ 撫子の声を聞いていました」

「話は聞いていない訳ですね。自分で言っておいて……」

撫子は、僅かに黄ばんだ古書を指で撫でると、そのあたりに落ちていた葉を拾って挟む。

そして本を横に丁寧に置いて、言う。

「清少納言は、どうもお気に召さないようですが」

そしてちらりとこちらを見て、僅かに頬を染めた。

「私は、薄もいいと思います」

秋の風に消え入りそうな言葉に、思わず彼女を抱き寄せるのであった。

四（後書き）

枕草子より引用。

清少納言は「ススキって最初はいいよ。いいけどね？ でも秋の終わりになると花は散るけど、ススキはいつまでも過去の栄光にしがみ付いて白髪頭でフラフラして格好悪いのよね。昔の事ばかり言ってる老人みたいで」（意識）

とか言ってます。ススキに何か怨みでもあるのか……

五

今はもう昔のこと。

とある町のとある店に、花のように美しいと評判の娘が居た。彼女はもうすぐその店の番頭になるうという男、佐助と恋仲であつた。ほんのささやかな恋で、手すら繋いだことは無いが、いずれ独立した後には夫婦になりたいと双方が思っていた。

ところがある年、その町に新たな店ができた。扱うものは娘と佐助の店と殆ど同じだが、その質は格段に良く、また商売人としても遙かに上であつた。あの手この手で新たな店は人気を得て、かつての本店は見る影も無く、借金を抱えて落ちぶれた。

さて、その新しい店であるが、丁度娘と同じ年頃の息子が居た。

彼は馬鹿にしてやろうと偶然訪れた店で娘を見て、一目で心奪われ、こつと言つたのである。

その娘を娶らせろ。そうすれば、店を助けてやろう。

無論、佐助を慕う娘はそれを拒んだ。店のためであろうともそれは受け入れがたい事。けれども、娘の母親はしきりにかの店の息子に嫁ぐことを勧めた。娘の父だけは、反対もしないが賛成もしないという立場を取っていたが、その目は嫁げと言外に伝えてくる。

いつしか2人は、結ばれぬのならばいつそのこと、と決心を固める。

佐助と娘は手を取り合い、共に死のうと町の外へ向かい　その途中で捕えられ、離れ離れにされた。

哀れ、娘は無理矢理手篭めにされて、望まぬ婚姻をすることになる。

すまん、店のためだ　と、信じていた筈の娘の父の声を聞きながら、佐助は井戸の底に落とされた。

惨い事に、佐助はすぐには死ななかった。落ちた時に骨が何箇所も砕け、血を吐きながらも死ねなかった。空腹も、周りに生えた苔を無理矢理口に入れて満たし、井戸は枯れていたものの時折降る雨に生かされ続けていた。

そして、ある秋の日。ついに苔を食べつくし、更に秋晴れが続き、男は餓えに苦しんだ。

幾度も井戸を上ろうとしたせいで爪は剥げ落ち、周りには生々しい血の痕や突き刺さった爪の破片が残される。痛みと空腹とに耐えながら、ただ娘への思慕だけを胸に生き永らえ。

そんな時に、かの息子が井戸の真上に立った。

おい、もう死んでいるだろうな。

あの女だが、昨日死んだよ。朝起きたら、隣で冷たくなっていやがった。

ふん、まあ、どうでもいい。いつになっても靡かん、つまらん女だった。

そして　彼が歪んだ笑みを浮かべたかと思うと、漬物石のような重い石が落とされた。

ついに、佐助はこの世を去った。　また、哀れな娘の名を、撫子と言った。

やがて時は流れる。ある秋の日の枯れ井戸の底で、ふと佐助だったものは目を覚ました。怨みのあまりか白くなった髪に、骨となっ

た体。もはや怨みだけしか残らない、空虚な髑髏。

彼としての意識は薄く、ただ井戸から出ては通りがかる人間を脅し、暴れ、後から後から溢れる怨みを飲み下そうとした。そしてますます人は近寄らなくなる。

いつしか入れ替わりに寄ってくるようになったのは他の妖怪だ。

佐助は　その頃には既に時とともにサスケが変化したのか、ススキと呼ばれていたが　時折正気に戻り、ほんの一時だけ元々の彼の性格を取り戻したかと思うと、また暴れた。

百と数年ほど経つと、もはや暴れる事すら嫌になるほどに恨みが染み付き、毎日ぶつぶつと怨み言を言いながら井戸の底で蹲った。昭和の頃に一度側に家が建ったが、その賑やかな声が疎ましくなつて脅しをかけると、すぐに引越していった。

そんな日々の中で、訪れたある妖怪がこう呼び掛けた。

なあ、薄。近頃じゃあ、人間を嫁に取るのが流行ってるんだと。

お前も嫁さん貰ったら落ち着くんじゃないか？

その時も蹲っていた彼には、最早佐助だった頃の記憶は無かった。しかし、嫁という言葉には僅かに反応した。

それから暫くして、撫子が現れたのである。

えー、九十九屋、九十九屋でござい。

妖力ランプに妖力テレビ、各種取り揃えておりやす。

着物に履物、食べ物やら小物やら、買えないもんはありやせん。
どうぞどうぞ、寄ってってくださいやし。

そんな声を背に去っていく、白髪に着流しの痩せた男。店の前に
揃って頭を下げていた店員たちは、顔を上げて胸を撫で下ろした。

「はー……怖かった怖かった」

「いやあもう、いつ暴れだすかと」

「しっかし、丸くなったもんだなー」

まだ年若い妖怪は首を傾げるばかりだが、比較的年老いた力の弱い妖怪ほどその様子は顕著だ。原因は無論、上機嫌で去って行ったあの男にある。

狂骨の薄といえは、もういつそ災害だと思っただ方がいいとまで言われた妖怪である。

自我が怨念に殆ど飲み込まれ、非常に扱いに困っていたという妖怪だ。

一度暴れれば人間妖怪見境なしに破壊の限りを尽くし、そうでない時は井戸の底で蹲ってぶつぶつと何か言っている。妖怪から見ても不気味すぎる薄にまともに付き合えるのは、力が相当強い妖怪のみだ。

彼らは辛抱強く、正気の時には話しかけ、狂気に染まれば力で止めていた。

そしてその薄がついにまともになった。

どうやら妻を娶ったらしく、今日はその妻のために、服やら食材やら小物やらを楽しげに選んで帰って行った。

「……ま、落ち着いて幸いさね」
「だよな」

衣服担当の2人、絡新婦じょうしゅうもと一反木綿がそんな会話をしている。
彼らもまた古参の妖であるため、暴れながら怨みを撒き散らす薄
を見てきたのだ。

安心はしたようだが、別に驚いた様子はない。彼らも薄が妖怪に
到る経緯を知っているから、むしろ納得している。

ただ、後日嫁を連れてきた薄のべたべたっぷりには流石に仰天し
たそうだが。

五（後書き）

にわか知識はいつもの事ですが、いつにも増して突っ込みどころが多いかと思えます。何か重大なアレがあったらボソツとお願いします……

それにしても、井戸からよじ登ろうとして爪が剥がれるって何かホラー映画で見ましたね。痛そう。

ここまでが拍手に掲載していた分です。残りは小話になります

六

ぽきんと音がして、一瞬彼女の腕が指が折れたのかと思った。反射的に振り向くと、どうやら違うようで安心する。なにやら鉛筆を握り締めて手を震わせ、珍しく眉根を寄せて苦悶の表情をしている。

「どうしたんですか？」

「いえ……親に手紙を書こうと思って。……どうも里から出ている方もいらっしゃるそうですから、届けてもらおうと」

そう言って、若干恨みがましい目を向けてくる。ああ、一生帰れないと言った覚えがあるな。

全然知らないので適当に言っただが。まあ、帰す気もないし間違っではないない。

「……実を言つとすね」

「はい」

「手紙というものをまともに書いた事が無いので。大変困っています」

「なるほど。では試しに私への恋文から練習しましょう」

「気を抜くとそういう事言いますね、あなたは……」

最初は嫌がっていたが、暫く粘ったら書いてくれた。

きみにより 思ひならひぬ 世の中の 人はこれをや 恋といふ
らむ

とりあえず小躍りしたくなるほど嬉しかったので額に入れて飾った泣かれた。泣き顔も可愛らしいのだが、胸が苦しくて見ていられなくなる。

仕方ないから外したが、この紙は大事にしまっておこう。

きみにより 思ひならひぬ 世の中の 人はこれをや 恋と
いふらむ

……あまりにしつこいから、適当に思い出した和歌を引用して書いたのだけど、まさか額に入れて飾られるとは思ひもなかった。しかも私では届かない高い場所に。

訳すると、“あなたのお陰で知ったこの気持ち、世に言う恋というもののですね”みたいな感じである。改めて読むと嵌りすぎて顔が熱い。ああもう、在原業平が憎い。あの色男め。

幸いというか、泣いたら流石に額を外してくれた。慌ててどうしていいか分からない様子の薄が見られたのでよしとしよう。

六（後書き）

新ジャンル「和歌デレ」

きみによりゝは在原業平。

何か現代でも通用しそうですね。絶対こういう歌詞ある。

七（前書き）

多少の性描写……ぐらしきものがあります。

七

ある日買出しから帰ってきた薄が、何やら　あからさまに怪しげな表紙のハードカバーを持っていた。何故か横に座った薄がぱらぱらとページを捲り、音読してください、と言う。

「道雄は美津子の白い肌に赤い痕を残すと、満足げに指先でなぞり、サディスティックな笑みを浮かべる。美津子は気丈に道雄を睨みつけるが、その目は潤み、頬は薔薇色に染ま　……って何ですかこれっ、官能小説じゃないですかっ」

「おや、読めないんですか？　仕方ないですね」
「馬鹿にしないでください！」

言った後で、あ、と思った。明らかに間違った。

そのまま、震えそうになる声で続ける。うううう、し、羞恥プレイというのか、こういうのは。

「……薔薇色に、染まっている。まるで誘うような顔だな、と道雄が、さ、囁く。すると美津子は」

「あなたも誘うような顔をしていますね」

変態が耳元で囁いてくる。無視したいのに、顔がぼつと唐突に熱をもって、全身がなんだかざわざわとして。無視。無視を決め込む。

「あなたを誘うくらいなら、犬でも誘った方がマシだわ、と」

「な、何てこと言ってるんですかつ！」

「あなたが読ませているんじゃないですかっ」

何てことを言うんだ、美津子。本当に。ちらりとその先のページを見てみると、少々目を逸らしたくなる展開だった。さ、さかりのついた、犬っ……犬と！？

「犬のように……？」

ああっちよつと気になる、気になるけど今はこっちが重要だ。真昼間から嫌なひらめきをしている骨男を、なんとか押し返さないといけない。

後日恐る恐る読んだその本を、そつと押入れに仕舞ってある座布団の下に隠してしまったのは内緒である。

前回は失敗したので、こんどはこちらが読んでみる事にした。

「お前は所詮籠の鳥。ふふ、私に愛でられるしかないのだよ」
「もう一度死にますか」

害虫でも見るような目で睨まれ、しかも新聞紙を丸めて叩かれそうになった。流石に心が痛んだので、やめることにした。

「すみません。愛してます」

「……っわ、わ、私も……あ、愛してます」

普段はつらつらと淀みなく語るのに、肝心な時にどもる彼女がいておしい。やはり彼女自身の言葉が1番嬉しいものだと思った。

七（後書き）

活動報告に乗せたネタから。

前半のはストレートなあれで、後半のは多分ハーレクインか何かじゃないでしょうか。

チヨイス悪い。絶対にチヨイスが悪い。

撫子もお年頃です。

でも家事を薄がやっている限りそのうち気づかれると思います。きっと、そつと机の上とかに置いておくんじゃないでしょうか。お母さんか。

八（終）（前書き）

軽い性描写に注意

八（終）

漸く、長生きする方法が見つかったらしい。

嬉しげにひとつの書物と藥らしき袋を差出してきた薄は、とても嬉しげだった。

「ひとつはこの藥です。一粒でおよそ千年長生きできるようになると」

「なるほど。……薄の寿命はあとどれくらいでしょうか」

「限りなく無限だそうです。普通の妖怪と違って、死人ですからね。

……もうひとつは、修行をして仙人となる方法だそうです」

なるほど。

最初から藥に頼るよりは、修行した方が良くかもしれない。なんとなく、ではあるが。

「ひとつは藥を作る方法で、その藥に似せたものがこれだそうです。効果に差はありませんが、私はぜひ修行をお勧めしたいです」

「私も、修行の方がいいとは思いますが」

「そうですね、では」

「え」

何故かにじり寄ってくる。とてつもなく嫌な予感がした。

「な、何ですか」

「薬を作る方法を“外丹術”といい、もうひとつを“内丹術”といいます。これは気を巡らせたりして体の内部に丹を練るというものだそうです」

「は、はい、一応知ってはいますが」

「知っているなら話は早いですね」

頭を巡らせ、仙道やらの知識を引っ張り出す。生憎とあまり手を出していない方面だったが　まさか、まさかとは思っけ。

「房中術と言うそうですが」

「薬でいいです！」

涙目で叫ぶが、止まってはくれない。かといって蹴ったり殴ったりしたら、折れそうで怖い。

最近この人が本当に死んでるのか疑わしくなってきた。体温が低めでガリガリで白すぎるだけで、見た目と違って物凄く旺盛というか、その、いやではないけど、えーと、言い方が！

「どうせなので、試してみましよう。ね？」

「ね？　じゃないですよ」

「ほーら、こんなに色んな方法が」

「きゃあああああ！」

多分人生で1番ものすごい悲鳴が出たと思った。

本を開いて、その挿絵を見た瞬間悲鳴を上げた撫子を抱き寄せる。
ああ、可愛い。

抱き締めると、熱を持った体が震えて、弱弱しく押しのけようと
してくる。

「へんたい……」

「変態でいいですよ」

「そもそも……ですね」

潤んだ瞳で睨められると、ぞくぞくとする。どうしてこんなに愛ら
しいだろうか、まったく。

「……仙道としての房中術はかならずしもそういったものを指して
はいません！ 黙って向かい合って気だけをやりとりする方法の方
が効果が高いはずですよ！」

「よくご存知ですね。この本にも載っていますが」

「分かっててやってるんですかつ！！」

本当に知識の幅が広い。うっかり変なこととも言えないので、最近
は私も随分本を読むようになった。読んでいると心なしか機嫌をよ
くしてくれる、という下心もあるが。

「でも、どうせなら修行で不老不死になりたいでしょう」

「そうですね……まともな修行なら、ですが」

「私は修行でも、薬でもいいです。ただ」

頬を両手で覆う。赤く染まった林檎のようで、とても熱い。

確かに、撫子と出会ってから随分欲が出て、何もかも欲しくて仕方ない。撫子の為なら何でも手に入れてあげたいし、かわりに撫子の全てが欲しいと思う。

けれど浅ましいその感情の奥底で、求めるのはただひとつ。

「どんな方法でもいいですから、一緒に生きてくださいね」

「……死人でしょう、あなたは」

「比喩的表現というやつです」

「はあ……」

人の姿でいるのにも、随分慣れた。細すぎる身体に肉を付けてほしいと思って、かなり料理に関しては勉強したし、上達した。だから、

「私が死人なら、ここが私の墓でしょう。一緒に墓に入って、毎朝私の作った味噌汁を食べてください。勿論昼も夜もちゃんと作りますから、きちんと成長してくださいね」

「……とんでもないプロポーズですね」

くすくすと撫子が笑う。あまり安売りしない笑顔は、それだけに希少価値が高い。撫で回したくなる。なんだかもう口を吸いたいというか、いや、でも、夜まで我慢して

「成長については、善処します。……まあ、一緒にいてあげてもいいですよ」

撫子が、軽く背を伸ばして、自ら唇を重ねてきた。

半日後、また怒鳴られる破目になったが、とにかくにも私は世

界一幸せな骨である。

極楽浄土よりもずっと、彼女の居るこの家は素晴らしいと心底思った。

八（終）（後書き）

昔のキスは口吸い〃ディープなやつで性行為の一環、軽いものは接吻（キスの訳語だそうで）とされたそうで。

調べてる途中でふと我に返って「何調べてんだろ……」と思うのはいつものことです。あああ。

そついう訳でひとまず完結とさせていただきます。

ここまで読んでいただいてありがとうございます。

ではまたいつか、気が向けば追加されるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7965z/>

井戸端の文学少女

2011年12月25日18時51分発行